

しもやけ・あかぎれ用薬

製品群No. 55

資料4-34

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	機能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)		症状の悪化につながるおそれ		使用方法(誤使用のおそれ)					スイッチ化等に伴う使用環境の変化
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ				
角質軟化・皮膚保護成分	ビタミンA	ザンネ軟膏					0.1~5%未満(紅斑、そう痒) 0.1%未満(発疹)					・皮膚刺激に対する感受性が亢進している患者 ・妊婦または妊娠の可能性のある者					本剤は眼には使用しないこと。		1日2~3回患部に塗原する	角化性皮膚疾患(尋常性魚鱗癬、毛孔性苔癬、単純性皰癬疹)
		ワセリン	黄色ワセリン	局方から黄色であるほか、白色ワセリンと同じ規格である。			頻度不明(接触皮膚炎)													軟膏基剤として調剤に用いる。また、皮膚保護剤として用いる。
			白色ワセリン(局方から)プロベト	局方から中性で、刺激性がほとんどなく寒暖により、粘稠度があまり変わらず、植物性又は動物性油脂のように光、湿気によって酸敗することが少ない安定な優れた軟膏基剤である。白色ワセリンは黄色ワセリンをさらに脱色したもので本質的に相違はない。			プロベト:頻度不明(接触皮膚炎)										プロベト:眼科用の基剤として使用する場合は、調製後滅菌処理をすること。 白色ワセリン:吸水性と、皮膚への浸透性が少なく、粘着性が強い。ろう、ステアラルアルコール、ラノリンなどを添加すれば吸水性は増加する。また、発赤、発疹、そう痒等の過敏症状があらわれた場合には、使用を中止すること。 ・ときに、漂白操作が不完全のため、刺激性が黄色ワセリンより強いことがある。			プロベト:眼科用軟膏基剤、一般軟膏基剤として調剤に用いる。また、皮膚保護剤として用いる。 白色ワセリン:軟膏基剤として用いる。また皮膚保護剤としても用いる。下界との接触及び水分の蒸散を遮断できるため、創傷面及び肉が面の保護や手足のひび、あかぎれにそのまま薄く塗布する。
鎮痒成分	塩酸ジフェンヒドラミン	外用はなし ジフェンヒドラミンはあり レスタミンコーワ軟膏					頻度不明(過敏症)										使用部位、眼のまわりに使用しない。		通常、症状により適量を1日数回、患部に塗布または塗原する。	痔瘻疹、湿疹、小児ストロフルス、皮膚そう痒症、虫さされ

しもやけ・あかぎれ用薬

製品群No. 55

頁 44-54

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重 篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意す べき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				
			併用禁忌(他 剤との併用によ り重大な問題 が発生するお それ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ		
抗 炎 成 分	グリチルレチ ン酸	テルマクリン 軟膏	グリチルレチ ン酸は急性 炎症に対する 抗炎症作用 (浮腫抑制- ラット、肉芽 腫抑制-ラッ ト、抗紅斑-モ ルモット)を有 する。抗炎症 作用は主成 分であるグリ チルレチン酸 の化学構造 が、ヒドロ コルチゾンの 化学構造に 類似していると 推定される。				5%以上又は 頻度不明(過 敏症)							眼科用として使 用しない		通常、症状により適量を1 日数回患部に塗布または 塗擦する。	湿疹、皮膚そう 痒症、神経皮 膚炎